

2017年9月6～8日、東京工業大学にて第28回廃棄物資源循環学会研究発表会が開催されました。受付横メディアホールで行われた市民展示では、「マイクロプラスチック汚染対策として私たちにできること」をテーマに、海・河川的环境保全、ごみ問題等に取り組む10の市民・団体等の方々が、日頃の活動内容をパネル等の展示物にて紹介され、多くの学生や教授らと熱心な意見交換が行われました。また、市民フォーラムとして市民展示とあわせたハイブリッド・セッションを大会初日6日13:30より開催し、東京理科大学 二瓶泰雄教授の講演・パネルディスカッション後、市民展示の出席団体の皆様に、展示内容・活動内容を発表していただきました。今回は代表して（一社）JEANと千葉大学環境ISO学生委員会の2団体に活動内容をご紹介します。

第28回研究発表会

美しい海をこどもたちへ

(一社) JEAN 事務局長 こじま 小島 あずさ

海のごみは、古くて新しい問題といわれています。昔から海辺にはごみがあったけれど、地球規模の環境問題という認識でとらえられるようになったのは近年のこと。日本では、古くから、住民清掃などの形で地域の海辺や川辺などでごみ拾いが行われてきました。年に1、2回そうして回収すれば、美観は保たれてい



写真1 海岸には大量のプラスチックごみがくり返し漂着する

たわけです。しかし、私たちがプラスチックの便利さになじみ、さまざまな場面を使うようになると、海辺のごみの様相が変りました（写真1）。プラスチックの軽さは、ごみとして散乱すると雨風で簡単に遠くまで移動する現象につながり、加工のしやすさからあらゆるものに使われることになり、安定性の良さはごみになった後もその場所に残り続けることになってしまいました。さらに、価格の安さは使い捨ての氾濫を生んだのです。これらの結果、ポイ捨てや不法投棄、管理不十分などで環境中に出たプラスチックごみが海に溜まることになってしまいました。JEANでは、わずか数十年の間にプラスチックごみ（以下プラごみ）だらけになった海を、少しでも美しく、健やかな状態にして未来の世代に渡したいとの思いで活動を続けてきました。

ごみを元から減らしていくために、拾

うだけではなくごみの中身を調査する国際海岸クリーンアップ（International Coastal Cleanup=ICC）に日本から参加するようになってから、27年が過ぎました。ICCは、米国の海洋環境保護団内のOcean Conservancyが主宰する活動で、毎年9～10月に世界中で一斉に行われるごみ調査を兼ねたクリーンアップです。当初は、日本国内の調査結果を発表するだけでメディアに取り上げられたものの、海のごみ問題が社会一般に認知されるには長い時間が必要でした。海のごみは海辺の地域だけの問題であり、海ごみになっているのは海辺のレジャーや漁業のごみが主体だと思われていたからです。また、他国から日本へと流れてきたものは、直接見ることができますが、自分たちの足元から流れ出したものは見えなくなるからか、ほとんど気にかける人はいませんでした。ですが、ICCの調査結果と考察から、海のごみの多くは陸域起源の生活ごみが大半を占めることや、日本から出たものは黒潮によってハワイや北米大陸の西海岸に多数たどり着いていることが明らかになりました。それでも、海のごみに取り組む現場と、生活や消費の場からごみを減らしていこうという活動が結びつく機会はありませんでした。暮らしのごみが海にまで流れてくるのだと訴えても、内陸部の人にはうまく伝わりません。日本の町なかには、あまりごみはなくてきれいに見えますし、ポイ捨てをしている人を見かけることもほとんどありません。ごみだらけの海岸の写真を示しても、外国起因のごみが多い一部の地域しか目につかなくても、海岸には繰り返

し漂着するので、高密度に溜まっていくという構造があるのですが、一言で簡単に理解してもらうには難しい面がありました。

こうした問題意識を共有しにくい状況を変化させたのが、マイクロプラスチック問題です。洗顔料などに生産段階で添加されるマイクロビーズもその一つですが、圧倒的に多くを占めるのはごみになったプラスチックが紫外線や波浪などで劣化して微細化したものです。JEANでは20年前に、プラスチックの微細破片問題を指摘しました。1997年に、クリーンアップ直後の海岸で、10m四方の7区画から砂の表面に残った小さな人工物を回収し、区画ごとに計測したところ、最多区画には32,258個のプラスチック片がありました。クリーンアップしても、すべてのごみを回収できるわけではないので、拾い残したプラスチックごみが古くなれば破片が増えていくのはわかりきったことです。でも、「マイクロプラスチック」として社会に認知されるまでに20年近い時間がかかってしまいました。ともあれ、マイクロプラスチックに関心が集まって、生活日用品がごみになり、一部は海まで流れていき、漂流しながら劣化して微細片になることが知られるようになりました。ようやく、いろいろな視点からごみの問題に取り組む人たちとつながって、一緒に改善にむけて進もうというところまでこぎつけたと感じています。廃棄物資源循環学会研究発表会では、展示と市民フォーラムを通して参加者のみなさんに、海のごみ問題の一端をお伝えすることができました。ここからは、生活者一人ひとりに問題意識を広げ、行動が変わっていくために一層努力しなくてはならないと思っています。